

創立の精神による一致を

中村 貢

△理事・女子大教授▽

学園の中に一貫教育ということが、ぼつぼつ語られるようになったことは嬉しいことである。一つの目的をもって、一つの精神によって建てられている学園は、いくらそれが大きくなり、教育の分野が多岐にわたっているとしても、そこには全てを包括し、それを貫いて流れているものがなければならない。わが同志社においては、当然それは校祖新島先生によって創められた、キリスト教を徳育の根幹とする精神教育、否、全人教育の中に流れている指導精神でなければならない。それ

は単なる思想ではない。新島先生の人格を通してほとぼり出る激しい行動力である。イエスの生涯が文字通り、右の頬を打つものに対して、左をも向け、上衣を取ろうとするものに、下衣をも与える生活であり、最後には十字架上から「父よ彼らをおゆるしく下さい。彼らは何をしているのかからずにいるのです」と祈った徹底した愛の行者であったように、この激しい実行力が校祖の中に絶えず脈打ち流れていたのである。まことに先生の歩まれた道は、イエスの歩み給うた道と同じく、いばらの道であり、十字架への道に外ならなかった。私は現在の同志社に、こうした理想を切に求める心と、はげしい愛による実践力が欲しい。これこそは新島先生が生命をかけて勝ちとられた同志社立学の精神と言えよう。一貫教育を論じる前に、われわれにはまず、こうした校祖の精神による一致がな

ければならない。

一貫教育と言えば、精神教育の方面と共に学科課程の方面も当然問題にされねばならないであろう。戦後間もないころ、たしか湯浅総長の時代であったと思うが、同志社の英語教育を、中学から大学に到るまで、一貫性をもたせてはどうかとの提案がなされ、それに付いてある程度の検討が加えられたと記憶するが、結局実を結ぶに到らず、現在に至っている。同志社の英語教育は一般的に言って、相当高く評価されており、常識的に考えれば、同志社のような学園では、学課のうちでかなりの程度に一貫性をもたせる可能性があり、またそれによって一段の実績を挙げることが出来るものではないかと考えられる。しかし現実的に考えてみると、これだつて決して容易な問題ではない。中学・高校といった六ヶ年間の英語教育を一貫したものとして考える

ことは可能であろう。そして現にこうした考慮は必ずやある程度行なわれていることであろう。しかし問題は高校と大学とのつなぎであり、また大学内における関連であろう。具體的に言つて学園内の中学・高校を経て同志社大学や女子大学に進学する学生の幾層倍の学生が全国から集つて来る現状において、かりに中学・高校での一貫教育が素晴らしい効果を挙げ得たとしても、この学生たちを含めて、他校出身の多くの学生に対処しなければならぬ大学に課せられた問題は、決して容易に解決出来ることとは思われない。

しかし本学園のように、二つの大学、四つの高校、三つの中学、一つの幼稚園をもつ一大綜合学園には、経理上からはもちろん、教育的な観点から考えて、なんらかの一貫性がないならば綜合学園の意味はないと言つてよからう。では現実的な問題として、現在のどの程度の一貫性があり、また将来いかにそれを發展させて行くべきであろうか。

およそ教育というものは、大学教育と言わず、高校・中学の教育にしても、それ自身各々完成教育であり、その意味において、それぞれ独自性がなければならぬ。と同時に申

学・高校の場合、それらは各々上級の学校に進む準備的な段階であることも事実である。そして大学といえども、そうした中学・高校が存在する以上、それらの学校の上に基礎をおいた教育の場であり、従つて、中学・高校の教育によつて制限を受けることは当然のことと考えられる。このような各々の関連性の中に一貫教育の可能性と限界が求められるべきであると思つた。

現在の同志社に、こうした具体的な問題について、じっくり考える場は一体どこに求められるべきであろうか。校長や学長はそれぞれの学校の運営と教授内容の充実に忙殺されて、なかなかこのような問題を考える余裕はありそうにない。また経営者たる理事者側はいつも当面の問題に追い廻されて、この重大な問題をじっくり考えるには、程遠い状態にあると考えられる。創立九十周年の記念事業は主として建築ならびに施設の拡充に重点がおかれた。激増する学生数と、急激に進展する時代の趨勢を反映して、こうした方面が重要視されたことは止むを得なかつた。しかし創立百年を十年の後に控えて、今後同志社のなすべきことは設備の充実と言うよりは、む

しろその設備の上に立つ学園全体の教育に対する鋭い反省であり、更にそれを将来どのように進めて行くかに対する熱心な研究と、実践との問題であろう。そして一貫教育はその中で最も真剣に考えねばならぬ一つの重要な課題であると思つた。

今までのいろいろな話し合いの場に臨んで思うことは、同志社というような、知識人でもあり、しかも新島先生の理想実現の一翼を担っている人々の集りにおいてすら、なかなか静かに、ひびを交えての気持のよい討議がなされ難いことである。他人の言葉に耳を傾けようとはせず、一途に自己主張と、他への激しい攻撃とに終始する心ない人がままあることである。こういう人が一人でもいると会の空気は乱され、一方ではなんら發展性のない言葉のやりとりが果しなく続き、他方は折角意見を述べたいと思つた人々も、不愉快な空気に庄せられて、発言の意欲を失つてしまふ。このような民主主義以前の、否、どんな時代のものにせよ、話し合いと名付けられる以前の現象が、わが同志社学園の中に見られることは悲しい。むずかしい問題に直面すればするだけ、謙遜になつて他人の意見を尊

重し、ユーモアを失はず、静かに話し合いを続けることが出来てこそ、真に発展的な解決の道は見出されるのである。学園の一貫教育といったような大事な問題は多くの熱心な人々によって、静かな場で真剣に話し合われることによってのみ正しい活躍が見出されるであらう。

騒がしい校庭に黙々として紙屑を拾って美化運動に努めていくくれる一団の学生諸君のあることを聞いた。学生といわず、教職員といわず、校祖の精神はおそらくこうした不言実行の人たちによって受け継がれて行くであらう。同志社の危機は財政面から来るとは限らない。むしろ真の危機は目に見えぬもっと深いところこそ胚胎しているのではなからうか。同志社の校歌がわれわれに示してくれる「一つの目的」に向ってわれわれの心は一つに結ばれねばならない。そうなつてこそ同志社の過去ならびに現在への反省と将来への方向づけがなされることであらう。これは創立百年を十年の後に控えたわれわれへの最大の課題と言えよう。

わたくしの場合

田畑 忍

△理事・法学部教授▽

同志社中学と同志社大学を卒業しているの
で、私は一貫教育を受けた一人だと言うこと
になっているのであらう。

ところで、私を同志社に導いて下さったのは、故高木庄太郎先生であった。即ち高木先生が、同志社中学を出て同志社大学在学中に草津キリスト教会の伝導師をされていたその時、その教会と日曜学校に出席していた私に英語を教えなどして、同志社中学二年第二期に編入学させられたのである。実に親切なスカウティングだったと言えよう。それは大正二年のことであるが、当時私は、早稲田大学にゆくつもりで、早稲田中学の講義録を取って勉強していた。しかしこの計画は、ガールズとリンカーンの話などをして下さったたりした高木先生のおかげで強引に変えられてしまった次第である。

もちろん小学校で軍国主義的偏見の教育に全くいやな思いをしていた私は、自由の学園・同志社中学に入学できて、まるで天国にでも入ったような心地がした。と言うのは、教頭の波多野培根先生を始め、加藤延年先生・三輪源造先生・久永機四郎先生・前窪勝之助先生・鈴木吉満先生等々が、生徒の人格と自由を尊重されていて、そこにはミリタリズムや威張り主義のムードがなかったからである。けれども例外はいくつかあった。例えば同志社と私学に軽蔑感をもっていた吉岡という数学の先生に対しては私はどうも反感をもたざるを得なかった。そして数学ぎらいにもなかった。また何となく英語の雰囲気になじめないで英語にも反撥するようになり、英会話の間にはアイ・ドント・ノーという癖がついてしまった。そして辞書をもたず予習もしなかった。大げさに言えば、弁論部と宗教部の仕事をするだけが私の中学生活のようなものであった註。

(註) 英文学の桜井忠一君(平安女学院長、中村遙君(大阪水上隣保館長)等が、当時から友人で同じく一貫教育を受けた諸君であるが、先輩の柳

島彦作(英語)・大塚節治(神学)・秦孝治郎・

黒川芳蔵(経済学)・高橋貞三(行政法)・黒田英三郎(経営学)氏等々、また田中貞一・大江直吉・岡本清一(政治史)・宮崎郵司(英語)・小倉襄治(社会福祉学)・島田敏介(民法)君等々、現に一貫教育を受けて同志社会学園に關係のある人々は数すくなくない。

私が天下に同志社ほどよい学園はないという確信をもつことができたのは、一つには、先輩の山室軍平先生・海老名弾正先生等の説教や、内村鑑三先生・吉野作造先生・賀川豊彦先生等の講演や、大学の中島重先生、前示高木庄太郎先生等の警咳に接することができたためであらう。鈴木吉満先生と大塚節治先生の倫理学の講義をとおして「ミューアーヘットの『エレメンツ・オブ・エシックス』や先輩・大西祝博士の『西洋倫理学史』を読んだことも、私には刺激でありプラスであった。

このような私の眼中に早稲田も帝大もある筈はなく、同志社大学だけがただ一つ大きく写っていた。そして最初私は、山室先生・賀川先生にかぶれて文学部神学科に入ったが、病気で二年間の休学をしてのちに、高木庄太郎先生(政治史)・中島重先生(憲法・法理学・国家論)のおられる法学部政治学科に転学した。そこで林要先生(社会問題)・住谷悦治先

生(経済学史)・長谷部文雄先生(経済学)等の講義をも聴くことになって、大西祝と内村鑑三と孟子等を読んでいた私の眼界は大いに広げられることを得た。特に中島重先生(フィアーカーントとテンニース)と林要先生(マルキシズム)のドイツ書講読によって啓蒙されたところがまことに大きい。そして卒業と同時に、法学部助手に採用されて、政治学と憲法を専攻することになった。

東京都立大学の松好貞夫経博(日本経済史)・香里高校長の村岡景夫君(ギリシャ哲学)・救世軍の山室武甫君・京大教授の猪熊兼繁法博(日本法史制(中退))等は、最初のクラスメートであり、神学部教授高橋虔神博(旧約聖書)・文学部教授酒詰伸男文博(考古学)・京大教授の足利惇氏文博(サンスクリット)等は二年後の同期生であった。これらの諸君は、いづれも同志社中学の教育を受けた人たちではなく、数から言えば、このようなルートの大学卒業生がいちばん多いであらう。例えば、政治学史の高田武四郎文博・政治哲学の今井仙一文博・中国法制史の内田智雄法博・労働法の恒藤武二教授・国家学の小野哲教授・法哲学の八木鉄男法博・商法の岡本善

八教授・民法の加藤正男教授等々は、この種類の同志社人であるが、他学部にもこの種の教授はすくなくある。

しかし同志社中学から他大学に進んだ湯浅八郎博士(アメリカ)・大沢善夫君(アメリカ)・大沢商會会長・谷田貞三郎君(京大、民法)・法学部教授)・和田洋一君(京大、新聞学)・文学部教授)・秋山哲治君(立大、刑法)・法学部教授)・松山秀雄君(京大、物理学)・工学部教授)・生島吉造君(アメリカ)等々の如きコースの同志社人もすくなくはない。立大からの宮井忠夫君(法学部講師)・鹿大からの熊原嘉昭君(生協)・阪大からの小野修君(法学部講師)等々、大学院だけを同志社で学んだ諸君も、同志社の精神を把んでいる。

また中学以来其の偉大なる影響を私が受けてきた山室軍平先生の如きは、一貫教育どころか途中退学をされて、しかも新島精神を世に輝やかした方である。蘇峯、芦花の徳富兄弟・永井柳太郎・三木武吉・山川均等の諸氏も途中退学組である。今日でもこの種の同志社人がすくしはいるであらう。また中島重先生や住谷悦治先生は同志社で教育を受けた方ではない。卒業後特に指導を受けてきた佐々

木惣一先生(憲法、行政法)・恒藤恭先生(法哲学、国際法)等も同様であつて、この部類に属する実に多くの同志社人に私は感謝の念を禁じえない。また彗星の如くに現れて去つてしまつた東大の岡倉古志郎君(国際政治学)・京大の樋口謹一君(政治学史)・長橋美子君(ドイツ語、ドイツ文学)等は、法学部教授会で常に必ず正論を主張した人々で、私はなつかしく敬意の念をもっている。

徒らに一貫教育に拘泥することの妥当でないことは言を俟たない。一貫教育の主張が狭量でないことと、為にすることがあつてはならないことを特に希望するゆえんである。しかし私自身は、一貫教育を受けただけでなく、三人の子女が悉く幼稚園・中学・高校・大学を一貫して同志社の御世話になつている。またそれ以上に徹底して私は一貫主義を持している。だから故滝川幸辰博士からの熱心なる招聘にもかかわらず、博士には内心お詫びしながらも、ついに京都大学には行かなかった。もちろん、こんなことは私の勝手に一種のセンチメンタリズムにすぎないであらう。京大に行つた有賀鉄太郎文博(キリスト教学)・岡田良夫教授(政治学)・阪大に行

つた滝川春雄法博(刑法)・熊谷開作教授(法史)・大野真義助教授(英法)等々の行き方も決してわるくはない。ただ私には私なりの流儀があるだけである。このような流儀の私には、今日の同志社が新島流の教育精神を失つて不経営に陥り、気魄などもなくなり、外観や機構の老大化に執心して質実剛健の他大学にとんだん追い越されている現状を見ていることは、何としてもやりきれない気がするのである。他の流儀の諸君にも同感の士が可成りにあると思う。お互いがんばつて、愛校愛学のムードを高める努力をしている次第である。

一貫教育の意味するもの

中 桐 大有

△文学部教授・教務部長▽

ひととき一貫教育という言葉がひんぱんに聞かれたことがあるが、ちかごろではめつたに聞かれない。けれども同志社内高校から推薦入学志望者を持ち出してこられる頃になる

と、ときに一貫教育という言葉を書くことがある。そのときにはどうやらこの言葉は、推薦入学者の数を大中に拡げてもらいたいという高校側の強い希望をいくぶんでも多く実現させたいためのテコ入れにつかわれているように思える。

考えてみると社内の中学校、高校、大学を通じての同志社的一貫教育という実態は、実証的な事実としてはどこにも見出されない。それはまだ社内教員の頭のなかにあるだけの理念であるにとどまつている、というのが正直なところであらう。そういうものを推薦入学強化のテコにつかうばあいには、一貫教育があたかも完全に無条件な推薦入学のことであるかに、きわめて安易に考えられているような印象をうける。

完全に無条件な推薦入学制ができれば、それで一貫教育の問題が片付くように思うのがまちがいであることは、かつて一九六一年ごろ社内教職組連合の世話で数回行なわれた教育研究集会での「推薦入学と一貫教育の問題」に関する研究討議ではば明らかになつてゐる。この研究集会は遺憾にも中絶した形になつたが、その当ても今もまだ多々問題を包蔵

している推薦入学制の最も正しいあり方は、一貫教育とは何であるかの追求のなかで考案されるべき問題であることを確認している。この確認には賛成できる。

さきの教育研究会は、ときの政府、与党の手による教育基本法改訂、教育課程改訂、私学法改訂などの状勢に対して、私学としての同志社学園の独自性は何であるか。総合学園としての同志社内諸学校を通じて打ち出される同志社教育の日本の教育に対する寄与は何であるかを追求の主なねらいとしていた。ちかいかい将来においてはそういった状勢に加えてさらに、大学一般教育課程の改訂、大学進学生望者の激増、中学高校においては進学生望者および在学者の激減という事態の訪れが予想されている。私学としての同志社学園内の諸学校を通じて打ち出される同志社教育のあり方は、もういちど追求され直す必要が十分にあるだろう。推薦入学制の合理的なあり方もそのなかで再考されるべきであると思う。

一貫教育の問題となると、その目標にどのような人間像がたてられるべきか、その目標のために必要な、中学、高校、大学の各教科の系統づけをどのようにすべきか、同志社

教育とは何であり、それはどのような方法を必要とするのか、このような諸問題をめぐっての社内教員の教育者としての自覚意識の培養をどのようにして達成するか、という初発問題から追求されなければならない状態にある。かつては教職組連合の肝入りで熱心者の間でこういった問題の研究討議が試みられたのであったが、問題の木戸口のところで中絶してしまった。わたしは予算的裏づけをもった機関が設置されて、一貫教育の研究がなされるべきであるように思う。今日の規模の同志社学園であって、その独自の同志社教育のあり方の自省的創造的研究のないということが、むしろそれ自体奇妙なことではあるまいか。安易な類推はしばしば危険ではあるが、今日ではちょっとした生産会社ならたいいその製品と生産工程の自省的創造的研究のための機関をもっているではないか。

困難を解決する緒口

藤井 久

△女子大教授▽

同志社の一貫教育については、今までに種々と論議されて来たし、また、今後も論議されて、やがては具体的な動きを見る時が必ず来るとは思うが、それへ至るまでには関係のある人たちの間での話し合いの気運の盛り上がりが必要かと思われる。その上で、諸機関の外面的、内面的な修正がなされよう。

同志社の諸学校で独立採算の方式がとられて以来、それぞれの責任において、同志社教育について真剣に考えられ運営されて、そのユニークな面をそれぞれが拓いて来たことは学園の多様性の良い面として認められてよいと思う。しかし、一つの幼稚園、二つの中学、四つの高校、二つの大学、一つの大学院の一連の同志社教育の体系がそのまま理想的に円滑につながっているとは必ずしも言えない。むしろ、時と場合と事柄によつては、利害が相反したり、方針さえ異なる場合もあり得た。また、そのことが互いの円滑な連絡を阻害する原因にもなりかねない。それは、それぞれが独立した存在のゆえに持つところの、よく言えば責任感から、わるく言えば面子のごときものこだわって共通の広い場へ出られない不自由な枠の中にあるためである

う。世帯が大きくなればそれだけ接触面が広くなり、それだけ交渉が激しくなるのも当然であろう。そして、その歩みよりも時間を要する。しかし、たとえ時間を要しても、同志社のためには、種々な矛盾を解くためにも一貫した教育方向が共通で考えられねばならない。そこに提出される問題はいろいろとあろう。たとえば、学園内での中高の強化と大学の中核としてのその進入問題、大学の質的向上への寄与、全学園の宗教々育深化、全寮制度、建物プロパーティの利用の問題、独立採算と系統機関との財政的な関係等その他種々提起されるであろう。

下から上まで一貫するからと言って、生徒学生の側で安易に進学出来るような誤解があってはならない。しかし、着実勤勉な学生は、この同志社の一貫した方針の下におけるそれぞれのユニークな教育によって、その潜在する可能性が導き出され、分に応じて働きの出来る人物、すなわち良心を手腕に生かせる人物として、社会に出て行けるようにすることである。これは教師の側では言うには易く、行なうにはむづかしい仕事ではある。しかし、この一貫した教育の場では、充分に計算

された親切的な教育の積み重ねのゆえに、より良き効果が現われるのではなからうか。

それにしても、絶えざる学園研究の間に、学生・生徒との人間交流に更に多くの時間をさく教師にとつて、学生・生徒の数、担当時間の数もまた問題とならうし、中高と大学との連り方によつては、その職場の資格・地位とか重心の変化も起り得ることであろう。しかし、学生・生徒と共に真剣に学ぶ教育者としての姿の中にこそこの一貫教育の困難を解決する緒口が発見されるのではなからうか。すなわち、学園の各教師の努力と学生・生徒の実力向上と学園諸機関の話し合いの進展に加えて、校友・同窓の認識と協力がある時に諸学校間に現在する諸問題の解決はもろろんのこと一貫教育の問題もつづいて具体化の方へ進むことであろう。一貫教育について各人がその理想をもつていられると思うが、最も妥当な相においての実現を期待しつつ年頭の夢を述べた次第である。

独創的人間

鈴木泰正

△女子中高校教頭▽

一貫教育という題が与えられているので、その中で特に重大と思える一面をとり上げて考えたい。

現在の学校教育、とくに青少年の育成にとり、大きな教育のひずみとなり障害となつて入るものに入學試験とその準備教育が指摘されている。しかも、これに対する適切な方法は、今のところ考えられていないのみか、文部省は一斉テストによつて益々そのひずみを大きくしようとしているかの観がある。丁度、戦争反対をとねえながら、戦争という現象を論ずる時にのみ平和論者で、戦争の培養基であり温床である日常生活で、常に戦争以上の対人的闘争心を養いつつあるおろかさには何の応手もないのと同様である。「青年よ、大志をいだけ」と叫びながら、汲々として保身の術を示し、一流校から一流職場へと、ケ

チくさい野心にすりかえていることにもなっている。人一代の大いなる野心とは、若き日に、無限の、未知の世界に、自然に、切り込みそれとたたかう勇氣であつて、社会や隣人と争うものでないと信じた。戦争は社会の退化現象であり、入試の競争も冷たい退化現象である。ここで、文明は必ずしも文化と併行しないという点も指摘したい。現代の文明は、主として物質的生活水準を引き上げつつあるもので、精神の偉大とか、真の人間性とかより、単なる安楽を求める面が強いといえよう。

民主主義的議論の究極が、外見の合理化とか、安楽であつて、真の幸福とか高さにゆきつくことはない。これは、文化価値とか精神の高下とかは、計量評価しがたく、従つて科学的思考の枠内ではその価値を事実として認めたいからである。一見合理的と見える方法によつて、真の人間性とか、精神の自由とかが捨てられて、社会が次第に非人間的となり、唯物的となり、破滅の方向にすすみつつある。文明がすすむと、地方の固有の文化は、ほろびて国のスミズミまで、大量生産による機械的な無感覚なものが、流行として行きわ

たる。

大都市集中、灰色の樹、機械のごとき人間、人間性を喪失したインテリとプロレタリア、スラム街、ノイローゼ等々、癌のごとき都市の成長ぶりである。

同志社が一貫教育をまもることは、誠に立派なことであるが、これだけでは、教育のゆがみを避けるという消極的一面を指したにすぎない。しかしこの点は当面の重大事である。

教育の方法については、現実という試験管の中で、人間の成育上最も適切な条件がとりあげられねばならないし、人間を如何に育てるかという根本的立場から、人間そのものの生理学的な、人間工学的な追求等も併せて、人間性を萌芽させるべき諸条件が適確に科学性をもつて検討せらねばならない。

人間は長く一貫して、むしろ感覚教育として教え込まれ、個性を基本として独創的人間を完成させねばならない。人としての成熟には時間を要する。単なる原理や教訓をつぎつぎと渡してゆくにとどまるものでなく、個人の中で統一ある成育発展を見まもることが大切である。学問や知識に人間的統一を与える

べきゆとりがなければ、真の人はつくれず、また宗教も科学も経済も生れまい。経世の大事が小さい利己心とすりかえられず、健康な若人の感情を正しく刺激してその内なるものの発育をねがいたい。同志社が創立者の精神のもとに益々その門戸を、同志社を望むものに向つて広く開くことも併せて望みたい。

より強い連帯性を

宮崎 郁 司

△経済学部教授V

普通学校時代の同志社では大学はその延長として存在し、大学が中心となる頃には普通学校はその中学部であつた。中学が中学校と改称して独自の体制を整えたのは第二次大戦も後半にはいつてからのことである。この傾向を嘆く人こそ多かつたが喜び迎える同志社はあまりいなかった。私は中学部が中学になつてからの生徒の一人であるが、このような変動の陰に、苦悩の渦に巻き込まれた幾多

の教師と学生がいたことを聞かされていた。その頃さきに岩倉に転出した同志社高等商業学校が中学生の心を誘った。五年生になると級友の意見は高商組と大学組に分立した。二つの同志社を目前にして選択の決断を迫られた私たちの心境は今日の高校生が学部選択のそれとは全く異質のものであった。いまの一貫教育研究課題は数年前、大塚前総長が提唱されたものであるが、歴史的にはそれは、当時大学と高商が恰も対立するかのとき観を呈していた時、すでに顕在していた。

キリスト教主義によって統一されている同志社諸学校、各学部が仮にそれに背馳するとすれば学園は寂智をあつめて問題の解決に向かうべきことを俟たない。しかし今日の問題は外部的要因に屈したかつての中学校、高商の分立分派とは本質を異にする故、単位校を附属校とするがごとき発想は安易にすぎ、百年の大計からみて、明日の燭光を見出すものではない。自立が統一を破り、経営を破局に陥れると論ずることはいたすらに情緒的不安を助長こそすれ、自らの思考の欠如を暴露するものに外ならない。創立者の遺志を継いで官僚機構、国粹主義と闘いぬいてきた同志

社では、一貫教育は一人ひとりの教職員が受持ち、現場でこれを実践、実証すべき性格のものである。単に一部に議論を委ねることは、利己的個人をして火中の栗を拾わせしめなにとも限らないのである。それとも、昔日の同志社を復元するために論究するものであればこれこそ最も慎しむべきである。その動機は船出したもの岸辺のしだいに遠のいていく廃墟をノスタルジックに眺め入るのと同じである。一貫教育は新島精神の充満した未来展望に依存する。

かつて高商の神棚事件、教育勅語事件、チャペル占拠事件と不幸な事件が続発した。「学生チャペル籠城」こんな見出しをつけた大新聞の号外が京都の路上をひらひら舞っていた。無知な町の人がチャペルとはスコップみたいなもんやろか、と囁いているのが聞こえた。思想が統制されると、批判意欲まで喪失する。同志社教会の執事と日曜学校の教師を勤めていた私は悲しかった。また日野予科長はじめ多くの人から信頼をあつめていた教授たちが治安維持法を楯に検挙され、湯浅総長の引責辞職を導き、同志社教育は一たん崩壊した。心臓を失った同志社は氣息奄えん、い

わゆる戦時体制に順応し、やがて各学校は分立してゆくことになるが、恰も手足だけが動いているかの観があった。

戦後逸早く湯浅総長を再び迎えた同志社は各学校が最大限の自由を保有する今日の礎石を据え、現在また文学部改組の機運ようやく熟し新しく二学部が誕生する日も近いことであろう。この状況下で一貫教育という暗示に富んだ着想を私は学部、学校間の連帯性を一層強靱なものとする方向で受けとめたいのである。新島先生の書簡集が示すように、先生は人心の腐敗を憂い、利己主義を戒め、国家社会の改良を強く訴えていられる。私はキリスト教主義による一貫教育の道標をいつもここに求めるのである。

理想の人間像

仁 井 国 雄

△女子中高教諭▽

例(一) 高三の授業風景
A 世界史の時間 教師「産業革命のくわし

い経過に付いてはN先生の経済の授業でなら
いますから、簡単にやって次へ進みます。」

B 経済の時間 教師「産業革命の一段的な
問題点は以上の通りです。具体的な展開は世
界史で習ったでしょうから略して、古典学派
に移ります。」生徒「結局習わずじまいじゃ
ないの!」

例(四)

A 中三の社会の時間 教師「手形のこと
は〇〇さんの説明した通りでよろしい。では手
形のくわしいことは、高校では、やりません
からしっかり覚えておいて下さい。いいです
ね。では次へゆきます。」生徒「ちよっと待
ってはいいな。ややこしいな!」

B 高校経済の時間 教師「預金通貨に関連
して手形小切手のことが図解されています
が、これは中学三年で、ちゃんと習ってきて
いるわけだし、時間も足りませんから省略し
て置きます。では……。」校内進学生徒「習
ったということは覚えがあるけど、中味はす
っかり忘れたわ、どうしよう!」外部よりの編
入生徒「(この学校の人たちは、とれだけ習っ
てきたのかしら、心配だわ)」

例(五) 創立記念日の若王寺早天祈禱会

「同志社中学生三名、学校を東に向かって脱
出いたしました。ことの次第は、こうであり
ます。……」高橋同志社高校長の熱誠あふる
ご奨励の後のこと。「君たち、よくきたね。」
「先生、私たち二人、女子中に入學してから毎
年創立記念日には必ず早天祈禱会にきまし
た。今日で六回目です。来年は卒業式の翌日
に、また二人で墓参にくることにしていま
す。」君たちよ。中高一貫して六年間、祈禱会
に出席。同志社設立の精神にも触れたことだ
ろう。僕は風邪で二度休んだ。君たちに頭を
下げるよ。

一貫教育という言葉は、「民主主義」と同
じく使用度数は多いが、内容は漠然としてお
ります。

(一) 教科課程上の問題と考えるならば、例(一)
(二)のような経験は中高の先生方は必ずお持ち
でしょうし、一工夫あつてしかるべしと考え
られます。社会科学教育に限定して発言しま
す。それは螺旋的発展をすべきものと考え
ます。反覆練習をしながら螺旋段階状に発展
してゆくのがよく、この場合の一貫教育は、
その途上の教材の整理整頓であるといえまし

よう。従って、かかる意味での一貫教育は、
後期中等教育にはつきものであって、それを
表看板にするのは、おかしいといえます。

(二) 教育課程における一貫教育は、われわれ
が理想とする人間像をめざして生徒を終始一
貫指導してゆくこと、否生徒と共に歩んでゆ
くことでありましょう。例(三)は文字通り一例
にすぎませんが、拜金主義の横行する現在に
おいても、大学にも女子大学にも中高にも、
理想の人間像を求めて真剣に悩み苦しみ精進
している学生生徒諸姉の多くおられること
を喜び、ともに手をとり合つて歩みたいと、
ひそかに念じているものであります。願わく
は学園が真に地の塩たるべき卒業生を一人で
も多く日本の社会に送り出し得ますように。

進学と一貫教育

浦野 信夫

八高等学校教頭

最近、同志社中学校を岩倉に移転しては、
また中高合併しては、という話がある。この

際、同志社の一貫教育の現実の分析について、高校に働くものとしての私見と併せて希望を述べさせていただき、高識の御批判を得れば誠に幸甚である。

中学⇨高校⇨大学といわゆるエスカレーター式に入試なく進学することが出来ること。新島先生に創始された同一学園で教育のモラルとしてキリスト教を徳育の基本としていること。この二つが同志社一貫教育の現実ではないかと思う。(われわれはこの教育効果を認め、かつ誇りとしている。)学習、教授、教育カリキュラムについては文部省の一般的な基準を一応目安として中学、高校、大学とそれぞれ独自の立場でつくられている。カリキュラムの統一性は文部省の一般基準という一般性に基いているだけである。独自の統一性もたれていない。もっともこの統一性が学問の内容までわたって行なわれると学問の自由が犯かされ、迷惑な話であるが、基礎過程、教養過程、専門過程という段階における調整はなさるべきである。また人間教育というか、モラルの育成においても、中学、高校、大学とそれぞれの立場の目標とかが調整されることも必要であろう。現実にはそれは独自

の立場で、適切に判断され行なわれていると主張されていることではあるが、最早や問題は無いのであろうか。

私の考えている問題の一つとして、高校から大学への推薦方式が挙げられる。現在は大学から^や枠が示され、商業高校、女子高、香里高校、高校と四者が多くの推薦入学希望者をかかえて、その限定された枠の中に自校の生徒をより多くという風な努力をせねばならない。最近大学側でこの枠を多少拡げていたいただけるようになって来て、われわれとしては感謝しているが、しかしまだ問題は残っている。

高校は同大推薦入学希望の生徒の中からこの枠に入り得る生徒を選びわけ、それぞれの学部^に推薦することになる。ここに種々の問題が起つて来る。その一つとしては、またそれはそれが一番重要だと思うのは大学進学について生徒が主体的な責任のとれる選択をなし得ないということである。自己自身の未熟の中に決定するということである。これは現在の学制では必然的に起ることでは一般的なこともかもしれないが、ならばこそ私は一貫教育の出来る同志社でこそ、その弊害はとりのぞく

べきだと思ふ。私が望むのは同志社内内の高校卒業生は希望するものは全部、大学へ推薦されるということ。(この場合、高校卒業認定は厳正に行なわれること当然の前提とする)大学は教養課程を一本化し強化すること。この二つである。その目的は二つ。各学部進学は教養課程終了の際、大学で決定することが出来るということ。教養課程未熟な段階での専門課程教育は学問と人間の自由な発展を阻外するという欠陥があるがこの欠陥をなくするということの二つである。

きびしく言うならば一貫教育は本質的な立場からすれば大学卒のときに教育が完成されたとするような教育過程を考えられるべきであって、そのためにもそれぞれの過程での連繫、調整がなければならぬ。それぞれの過程での問題点の提示、交渉があつて始めて、現実の具体的なふれ合いがあつて一貫教育の問題は解決され、発展して行くものではないかと愚考することを最後にお許しいただきたい。